

# 居住者アンケートにより把握された 防犯意識の構造

住宅・都市研究グループ 主任研究員 小島 隆矢

## はじめに

犯罪の急増という社会問題が背景となり、H14年度より建築研究コンソーシアムにおける共同研究として「共同住宅総合防犯システムの研究開発」がスタートした。本稿では、防犯意識の構造を把握することを目的として、この研究の一環として行われた居住者アンケートのデータに対して統計的因果分析を適用した結果を報告する。

## 調査の概要

本調査は、首都圏（一都三県）の集合住宅居住者 390 名を対象として、2002年12月～2003年1月に実施したものである。調査対象者は、(株)セゾン総合研究所の調査モニター登録者より、分譲/賃貸、年齢層（20代～60代以上）、性別、居住地域などの属性が偏らないよう考慮してサンプリングされている。配布・回収とも郵送にて行い、本稿の分析における有効回答は 313 名（回収率 80.3%）となった。

調査内容は多岐にわたるが、本稿では、周辺地域の評価、防犯設備の有無、住居の防犯対策評価、犯罪被害の認知、犯罪への不安感、防犯対策実行の有無、防犯設備への関心・意識といった設問を分析対象とする。

害の認知、犯罪への不安感、防犯対策実行の有無、防犯設備への関心・意識といった設問を分析対象とする。

## 分析方法

本稿では、調査項目間にみられる相関関係の背景構造を説明する因果モデルを得るため、構造方程式モデリング（SEM: Structural Equation Modeling）を用いる。解法はいずれも最尤法とした。以下に報告するモデルの適合度はいずれもかなり良好な値となっていることを附記する。

## 防犯意識の高い地域とは

まず、「周辺地域の評価」についての因果モデルを図1に示す。SEMでは、実際に観測した変数（観測変数）を四角形、因果関係のキーとなる仮説的な変数（潜在変数、因子）を楕円で囲んで示す。小さな「e」は残差を表す。ここでは、7つの観測変数は、それらの表現に周辺地域があてはまるかを4段階評価させたものである。図1の因果モデルは、地域の特色は「便利・賑やか」「静か・自然豊か」という2つの因子で概略つかめることを表している。さら

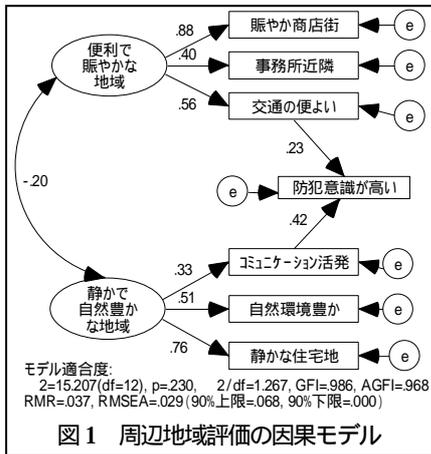


図1 周辺地域評価の因果モデル

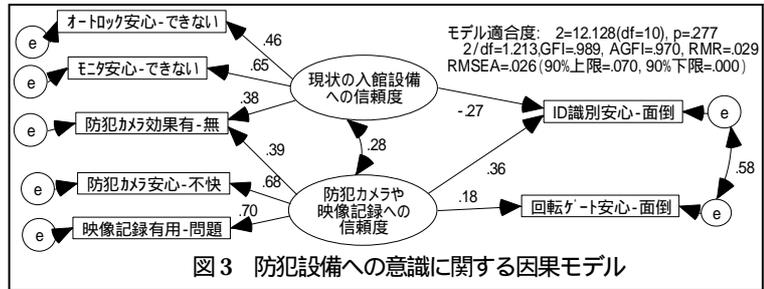


図3 防犯設備への意識に関する因果モデル

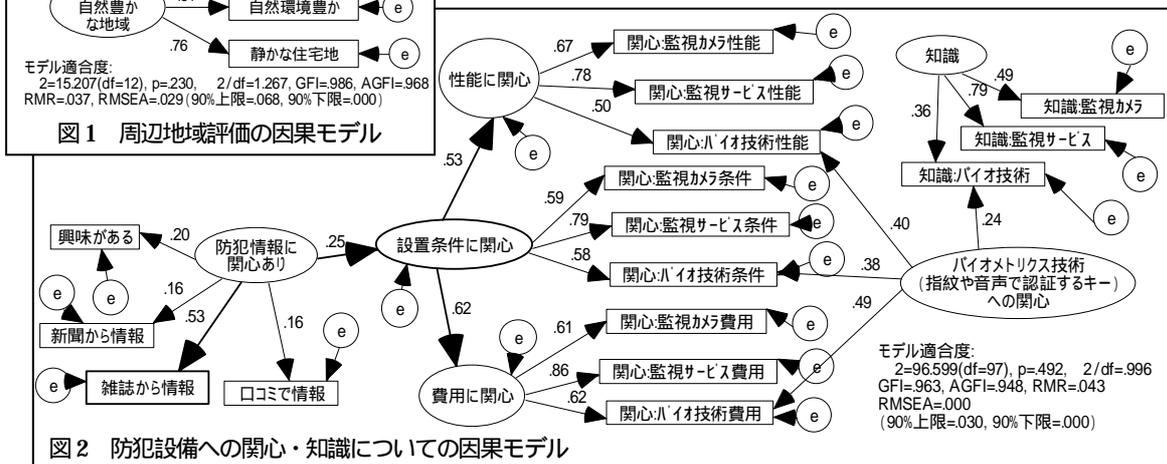


図2 防犯設備への関心・知識についての因果モデル

